

ローマ人への手紙 #37 「神の永遠の目的」 8:28～8:30

2024/2/18

はじめに

ローマ人への手紙を通して、救いの3つの側面である義認、聖化、栄化を学んできました。今は信仰の完成である栄化を学んでいます。8章後半はこの手紙のクライマックスであり、山で言えば頂上というべき箇所です。

先回まで学んだ内容をおさらいします。パウロは、クリスチャンが栄化に向かう過程で必ず苦難を経験することを教えています。主イエス様もご自分の受難を予告された後で次のように言われました。

マル8:35 **だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**

イエスを憎み十字架につけた世の人々の中、世の価値観の中で、キリスト仰ぎ、キリストに従って生きていこうとするときに、苦難があるのはむしろ当然なことです。クリスチャン生活には苦難が伴います。しかし、この苦難を乗り越えるために、神は私たちに3つの慰めを備えてくださいました。

① 私たちが通過する苦難には意味があります。クリスチャンが通過する苦難は、新しい世界（千年王国）を生み出すための「産みの苦しみ」です。今は被造物も、神の子である私たちもうめいています。しかし、このうめきはやがて大きな喜びに変わります。

② 私たちには、助け主なる聖霊が内住してくださっています。聖霊は力と愛と慎みの霊です。私たちがどう祈ったらいいかわからないときに、聖霊が言葉にならないうめきによって、いつも私たちのためにとりなしてくださいます。

③ 神の永遠の目的があります。これが今日学ぼうとしているテーマです。神の永遠の目的を成就するのが、神の摂理の御手です。クリスチャンは神の摂理の御手によって最終ゴールに導かれています。

1. クリスチャーの確信

8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。

聖書は「はじめに神が天と地を創造された」という言葉で始まっていますが、聖書が啓示している神は第一に創造主であることを私たちは信じなければなりません。次に天地万物を創られた神は、全被造物を放置なさる神ではなく、創造された時から深くかかわりを持ち続けておられます。これを神の摂理といいます。

ウエストミンスター小教理問答を見ると Q 1 1 神の摂理の御業とは、何ですか。

A 神の摂理の御業とは、神が、最もきよく、賢く、力強く、すべての被造物とそのあらゆる動きを保ち、治めておられることです。とあります。

広大な宇宙の中から見ると、私たちの住む地球は豆粒ほどの存在ですが、そこに人間をはじめ多くの生物が生存できるのはなぜでしょうか。神が太陽の光や熱、空気、雨、そして必要な食料を備えてくださっているからです。無数の天体の運行、国家の興亡、小さな空の雀の一匹の生命さえ、神が保ち、治めておられるのです。

聖書は、神の主権的な支配が次の領域や事柄に及んでいることを教えています。

- (1) 宇宙全体 (詩 103 : 19, ダニ 4 : 35, コロ 1 : 17)
- (2) 自然界 (詩 104 篇, 135 : 6, マタ 5 : 45)
- (3) 動物界 (詩 104 : 21, 28, マタ 6 : 26)
- (4) 国々, 諸民族 (ヨブ 12 : 23, 使 17 : 26)
- (5) 人間の誕生とその生涯 (詩 139 : 16, イザ 45 : 5, ガラ 1 : 15 - 16)
- (6) この世における人間の栄枯盛衰 (詩 75 : 6 - 7, ルカ 1 : 52)
- (7) 外見上偶発的に見える事象や事柄 (箴 16 : 33, マタ 10 : 30)
- (8) 神を信じる正しい者たち (詩 4 : 8, 5 : 12, 63 : 8, 121 : 3, ローマ 8 : 28)

(9) 神の民の必要の充足（創 22：8, 14, 申 8：3, ピリ 4：19）

(10) 祈りに対する答（Ⅰサム 1：19, Ⅱ歴 33：13, 詩 65：2, マタ 7：7, ルカ 18：7）

(11) 悪しき者の摘発と処罰（詩 7：12 - 13, 11：6）

もちろん人間はロボットではなく、神に形に似せてつくられ知性や感情、意志をもっています。ですから私たちがどう生きるかによって神の摂理が異なってくることは知っておかねばなりません。私たちは**神を愛する人**となっていかなければなりません。

「**私たちは知っています**」とあります。これは神から教えられて信仰的に確信しているということです。クリスチャンの確信です。初代教会のクリスチャンもこのことを体験していました。皆さんも、今日までの信仰生活の中で経験してこられたことと思います。

それは人生で起こる様々なこと、大きなこと出来事も、日常に起きる些細なことさえ、また良いこともマイナスと思える試練、迫害、苦しみ、病気、老い、死別といったものでさえ、神は自分の子どもたちに対して最終的に益としてくださるという確信です。神は今日も私たちを愛し、最善なものを与えようとして働いてくださっています。主は良いお方です。

28 節の約束は人間一般にあてはまることではありません。神を愛する人たちにとって益となるのです。そしてここに書かれているように、神を愛する人とは、神のご計画にしたがって召された人のことです。愛する（アガパオ）の自制は現在形です。過去に神を愛したのではなく、神を愛し続ける人のことです。神と私たちの関係は、日々新鮮で永遠に続くものです。今試練の中にある人、弱さを覚えている人は、神を愛することを心掛けましょう。摂理の神の御手が、試練さえ相働かせて益としてくださいます。

神を愛する人とは神のご計画に従って召された人だと、パウロは言い換えて説明しています。神を愛する人たちとは人間側の視点です。一方で神のご計画にしたがって召された人とは神の側の視点です。そもそも神がまず召してくださらなければ、人は神を愛する人となることができないのです

益となるとは、前後の文脈を考えると私たちが人間的に考える祝福ではありません。つまり物質的な祝福やこの世の成功ではありません。そう考えると、私たちが経験する苦難とは、神の救いのご計画（義認・聖化・栄化）の一部であることがわかります。

2. 神の永遠の目的（29節）

さて、神の永遠の目的、神のご計画のゴールとは何でしょう。それは御子イエスが、被造物の相続人である王として世界を統治して、私たちクリスチャンも御子イエスの共同相続人である王として被造物世界を統治することです。

ヘブル 1:2b 神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。

そのために神は、人を神の御子の似姿として創造されました。

ローマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光とともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。

御子イエスは長子である王として、父なる神の右にあって被造物世界を収め、御子を信じる私たちは神の家族です。

8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

そして、神のしもべとしての謙虚な心を持つ王として世界を収めるのです。黙示録は御国の完成の状態をこのように描写しています

22:3-5 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは世々限りなく王として治める。

これが神の永遠の目的であり、神のご計画のゴールです。

私たちは、これまでのローマ人の手紙の学びを通して、救いには「義認、聖化、栄化」という3つの要素があることを知りました。しかし、今日の聖句には、それらの3つの要素の前に神の準備があることを教えています。

それは、① 神の事前の知識、② 神の事前の選び、③ 神の召し（招き）というものです。この3つの要素がなければ、私たちの救いはあり得ません。つまり、私たちが救われたのはすべて神の恵みによるということです。

パウロは、私たちクリスチャンを **神は、あらかじめ知っている人々**と表現しています。神は私たちが存在する前から、私たちを知っておられた。なぜ知っておられたか、神が創造の前から私たちを選んでおられたからです。

エペ 1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

では、なぜ事前に私たちが選ばれていたのでしょうか。神のご計画のゴールである御子を長子とした神の家族に私たちを連ならせるためです。

それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

ただ神の選びについては、クリスチャンは感謝し励まされつつも、慎重に扱わなければならない神学だと思います。選びは神の主権であって、私たちが他者の選びについて軽々しく口にすべきではないでしょう。そして自らにあっては、選びにあぐらをかいて自堕落であってはなりません。

3. 神の摂理の御手（30節）

8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。

神の摂理の御手は、神を愛するクリスチャンにどのように働くのでしょうか。29節、30節に「あらかじめ知り」、「あらかじめ定め（選び）」、「あらかじめ定めた人たちをさらに召し」とあります。

神はキリストのうちに選んだ人々を召して、キリストと一つとされます。古代世界においては王に召されるということは、民にとって光栄なことであり、召されていないのに王の前に直訴すれば死ななければなりませんでした（エステル記参照）また王の召しを拒んだものは激しく処罰されました。王の王であるお方からの召しに答える人は幸いです。

神は御言葉と聖霊によって召して（招いて）くださいます。この招きを信仰によって受け入れた人を、神は義と認めてくださいます。

召した人たちをさらに義と認め、義と認めるとは「デイカイオウ」という動詞で、これは義認のことです。すでに学びましたが、私たちは律法に従うことによってではなく、信仰により、恵みによって義とされます。義とされるとは、神との関係が正されること、無罪宣言を受けること、神の怒りから救われることです。

義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。この聖句には聖化は出てきません。ここでは聖化と栄化は明確には区別されていませんが、パウロは聖化という地上生涯における道のりを、栄化というゴールに含まれる概念として捉えています。ですから栄光をお与えになりました。とは、聖化を含んだ栄化のことです。

「栄光を与える」は、「ドクサゾウ」という動詞です。これは「からだの贖われること」であり、救いの完成です。つまり、私たちの栄化が成就するということです。摂理は、栄化というゴールに私たちを導く神の御手なのです。

28節、29節には5つの動詞が出てきました。あらかじめ知り、あらかじめ定め、さらに召し、義と認め、栄光を与える。

これらは動詞の自制はすべてアオリスト形です、つまりすでに起こった事実として書かれています。栄化は未来のことですが、神の視点からはすでに完成しています。これによって摂理が救いの完成を保証していることがわかります。

- ①神は、ある人々を、キリストと同じ姿に選び予定し計画を立てた（選び）
- ②神は選んだ人々をキリストにある命へ召した（召し）
- ③神は召した人々をキリストにあって義と認めた（義認）
- ④神は義と認めた人々に栄光を与え、御子のかたちに似たものへと変えていく（聖化・栄光）
- ⑤神の王国が完成するとき、御子は神の家族の中で長子となる（神の王国の完成）

28節のすべてがともに働いて益となるの益とは、義認、聖化、そして栄化（御国の完成）を意味しています。神は摂理の御手を動かして、うれしいことも、悲しいこともすべ手を相働かせ、神を愛する者たちのために義認、聖化、そして栄化（御国の完成）へと導いてくださるのです。ハレルヤ！